

中級読み書きコース試案 ー読み書き行動アンケート、ニーズ分析と合わせてー

平田 裕

要旨

関西外国語大学留学生別科の日本語プログラムでは、会話と読み書きの授業を分けているが、筆者にとって読み書きの授業内容をどうするかというのは継続的な課題となっている。本稿では、外国人の日本語学習者にとって実社会でメリットの大きい日本語読み書き能力とはどのようなものか、そして、それを如何に授業内容に反映させるかというところから考え直し、中級における読み書きの新しいコースデザインを提案する。読み書きに特化したアンケート調査を行い、ニーズ分析も行った。今回の試案では、「暗記・学習・習得型」の授業内容から、「自習能力を開発・育成するため」の授業内容への大きな発想の転換を行っている。

【キーワード】 中級読み書き、4 技能、漢字、ニーズ分析、自習能力

1. はじめに

日本語教育では所謂 4 技能、「聞く」「話す」「読む」「書く」、をバランスよく伸ばすことが謳われ、日本語の教科書でも強調されていることが多い。しかし、いったいどういう状態が学習者にとって「バランスがよい」状態なのであろうか？これまでの日本語教育で想定されているバランス、また、日本語の教科書で目標とされているバランスは、初級の教科書では「会話力」を「読み書き能力」に多少先行させる傾向はあるものの、大体のところ全ての技能を漠然と同等に扱うアプローチと言ってもいいのではないだろうか。初級と比べてみると、中級の教科書においては「会話」と「読み書き」の垣根が更に低くなり、読み物を題材として会話練習を組み立ててあるようなものや、逆に、会話に重心をおいてダイアログを提示しているのであるが、それを題材として「書いてみよう」的なアプローチを取るものが多く見受けられる。

本稿では、4 技能の「バランス」について掘り下げて考え、外国語としての日本語

学習者にとってメリットの大きい読み書きのスキルとはどのようなものか、改めて問うところからスタートし、中級レベルでの読み書きのコースデザインの試案を提示する。ひとつのコースとしてできるだけ網羅的なデザインを心掛けたいが、考慮もれの可能性もある上に、教育機関ごとにコース内容の要件が異なる場合も多いであろう。本稿のコースデザインを実施するためには様々な問題があることは容易に予見されるが、ここでの検討内容が日本語教育における「読み書き」再考の題材になれば幸いである。

2. 学習者の読み書き能力の実際

日本語教育で広く謳われている「4技能をバランスよく」という言葉に反し、現実としては学習者の読み書き能力は相当ばらついていると言えるのではないだろうか。関西外国語大学の日本語プログラムでは、会話（Spoken Japanese、以下 SPJ と略）と読み書き（Reading & Writing Japanese、以下 RWJ と略）が別のコースになっているが、2010 年秋学期の留学生 423 名のうち全く学習歴のない 64 名の学生を除いた 359 名で見ると、SPJ のレベルと RWJ のレベルが同じである学生は全体の 69.6%、250 名である。つまり、約 30% の学生は会話のレベルよりも下のレベルの読み書きのクラスに入っている。本学のプレースメントテストの内容、また、プレースメントの仕組み自体が 4 技能のバランスを議論する際にどれだけ妥当なものであるかという問題はあがるが、ある基準を設定したときに会話力と読み書き能力でばらつきが見られるという事実の確認にはなる。（本学では全員一斉のプレースメントテストによるクラス分けの後、SPJ と RWJ、それぞれのレベル毎にデザインしたテストを実施してレベル分けの調整を行っているので、テストフォーマットによる妥当性の問題は少し低減していると言えるだろう。）

また、本学の留学生別科では SPJ の履修は必須であるが、RWJ は選択科目であるので、2010 年秋学期では RWJ を履修していない学生が 25 名いる。ひとつの見方としては、これらの学生は学習者自身が 4 技能のバランスを取ることにそれほどの意義を感じていないとも言えるであろう。

本学の留学生は世界 40 数か国から来ているが、そもそも本学の日本語プログラムで会話と読み書きを別コースにしているのは、世界中から来る日本語学習者の会話力と読み書き能力を、一様にバランスが取れたものとして扱えないという現実があるからである。言い換えると、他大学では短期の留学生対象ではなくパーマネントの学生

を対象として会話と読み書きを同一コースにしているプログラムが一般的なのであるが、その中で、例えば J101、J201、J301、、、のように 4 技能のバランスが取れているような形で進級していったとしても、実際の学習者の中では 4 技能のバランスが取れていないケースが少なくないということである。

このように、実際の学習者の状況を見てみると、「4 技能をバランスよく」という言葉は形骸化しているとも言える。その理由としてはいくつか考えられるが、まず、日本語教育を行う側が学習者に対して「4 技能をバランスよく習得するメリット」について説得力ある説明ができていないことが挙げられるだろう。それと呼応する形で、学習者自身が「4 技能をバランスよく習得する必要性」を感じていないケースが多いとも言える。ここで、私達日本語教育に携わる者としては、外国語として日本語を学習する外国人にとって、「4 技能をバランスよく習得する必要性は本当にあるのだろうか」、「よいバランスとはどういうことなのか」と自問するところからスタートしないといけないのではないだろうか。

外国語学習で実際に習得した成果のメリットという視点で考えてみても、会話力と読み書き能力ではその実用性において大きな差がある。会話の場合は、初級の文法や単語しか習得していない状態であっても、学習者は実際の社会でネイティブの日本人と会話をを行い、機能することができる。海外の学習者でも、日本語のクラスの外に出て、日本人の友達や日本食レストランの店員と会話することで、会話力という成果物の実用性を感じることができる。日本で学習している留学生であれば、日本での生活全てにおいて、習得した会話力のメリットを実感することができる。

これに対し、読み書き能力の場合は、初級段階での実用性は極めて限定的だと言える。これは、会話行動と読み書き行動の形態の違いによるところも大きい。会話は基本的に個人対個人であり、しかもその場を共有して直接コミュニケーションを行うものである。日本人と外国人学習者の会話という形態はごく普通のものであって、日本人の方が学習者の能力の方に会話の水準を合わせようとすることも多い。一方、読み書きにおいて一番頻度が高く最もメリットが大きい行動とは、書籍、雑誌、インターネットなど、不特定多数の読者を対象として書いてあるものから情報を得ることである。これらの膨大な情報はネイティブの日本人を対象として書いてあるので、初級の学習者では全くと言っていいほど歯が立たず、読み書き能力の実用性やメリットを感じることができないのである。学習者にとって、日本語を読む／書くという行動が日本語のクラス内のみ、読むものは日本語の教科書と日本語の教材のみ、書くものは日

本語学習のための課題のみ、このような状況が大多数であると思われるが、これでは学習者が読み書きの実用性とメリットを感じることはやはり少ないであろう。

日本語の読み書きでは漢字の問題は避けて通ることができないものであるが、漢字も上述のような傾向に拍車をかける要因になっていると考えられる。普段日常生活で漢字に囲まれ、漢字を常用している私達日本人でも、漢字を忘れてしまうことは多い。学習者にとって、漢字が日本語のクラス内だけのもので、実社会で漢字に接する機会が少ないのであれば、すぐに忘れてしまうというのも想像に難くない。アルファベット系など、表音文字の場合は正確な綴りを忘れたとしても、単語として覚えていれば、実際の読み書きを実用上こなせる場合も多い。しかし、漢字の場合は、忘れてしまうと単語自体の認識もできなくなってしまうのである。

会話と読み書きを同一コースで教えるか違うコースにするかに関わらず、読み書き能力の実用性やメリットをどのように学習者に説明するか、どのように実用性のある教育内容を提供するかは日本語教育を行う側である私達にとって大きな課題だと言えるであろう。

3. 現在の読み書き教育の問題点

3.1. アプローチと意識の問題

ここで現在の日本語教育における読み書き能力開発の問題点を考えてみる。まず第一に、外国人を対象とする日本語教育は日本人を対象とする国語教育とは違うはずである、違うべきであるというのが日本語教育の原則のひとつであるが、読み書きにおいては少なからず国語教育的になっていないだろうか。これは、言い換えれば、外国人を対象とした日本語教育における読み書き教育の目標が、日本人を対象とした国語教育とは違ったものとして明確に設定できていないということである。

例えば、漢字学習の指導において、所謂、「止め」「はね」「書き順」などを必要以上に強調するのは、私達日本人の教員の学習経験をそのままコピーしているものだとも考えられる。実社会においては、私達日本人の手書き文書でも「止め」や「はね」を正確に書いているものは少ない。また、日本人の中でも「書き順」は単なる目安に過ぎず、書いたものを見て書き順の正誤が問題になることはない。「右」と「左」の上部の書き順が違うことなど、書き順においてはトリッキーなものが少なくないが、それらは国語豆知識のようなもので、日本語能力全体に影響するようなものではない。ここで重要なのは、一般の日本人の文字認識に適合する水準に達するように、という

ことだけではないだろうか。

例えば、「高」「字」という2つの漢字の冠部分の形状の違いは、日本人の漢字識別では重要な部分である。そこに影響する画数や「止め」「はね」の問題は手書き文字では重要であると言えよう。また、例えば、「学」「賞」という漢字の冠部分の形状の違いにおいては、書き順の問題が形状や全体のバランスに及ぼす影響も大きい。「国」などの囲いの形状も、画数や書き順の影響は大きい。これらに対し、「快」のりっしんべんの書き順や、「月」の右下をはねているか止めているかは日本人の中でも個人差や書いたときの状況によってかなりバラつきがあり、字の識別に大きな影響を及ぼすものではない。

さらに根本的な問いに遡れば、これだけワープロが普及した現代にあつて、外国人の日本語学習者にとって日本語の手書き能力が日本語の授業以外でどれほど有用なものであるのだろうか。手書きの練習においては、これも国語教育の影響であるが、いまだに原稿用紙を使うケースも見られる。縦書き自体も少なくなっている現状において、原稿用紙の罫目の使い方や書き直し方など、原稿用紙の使い方を教える意義はどれほどあるのだろうか。

もうひとつ意識上の大きな問題は、「日本語の読み書き」＝「漢字の学習」になってしまいがちなところである。日本語の読み書きの特性上、漢字学習に多大な時間を割くことになるのは仕方のないことであるが、学習者の方も「日本語の読み書き」＝「漢字の学習」という感覚が一般的に強いようである。教員側が読み書きのレベルを考える場合も、既習漢字数で考え、学習者も「習った漢字ばかりだから」「漢字が易しいから」というようなコメントを口にすることが多い。

日本語の読み書きにおいて漢字は確かに避けて通ることができない問題であるが、外国語教育の読み書きに必要な内容とはどのようなものだろうか。漢字の問題がない外国語、例えば英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語などの外国語教育での読み書きの内容を考えてみるのも、新しい視点につながるのではないだろうか。

3.2. 教科書の問題

日本語教育に携わる私達が上述のような考え方で読み書き教育を組み立てると、教科書の読み書きの部分も国語の教科書になるのも当然であると言える。網羅的なものではないが、初級教科書の『げんき I, II』、『リビングジャパニーズ Book 1』、『なかま』、『Situational Functional Japanese 1, 2, 3』、『Japanese For Everyone』、また、中級教

科書の『中級に行こう』、『中級を学ぼう 中級前期, 中級後期』、『日本語中級 J301』、『上級へのとびら』、『新日本語の中級』、『An Integrated Approach to Intermediate Japanese 中級の日本語』、『日本語中級読解入門』などを見てみても、教科書内で読み書きを独立させるか、ダイアログ的なものを読み物として併用するかということによって多少の違いはあるが、現在市販の日本語教科書では大体において「読み物」があり、「新出漢字」と「新出単語」があり、「表現説明」「漢字の練習」「単語の練習」「表現の練習」「内容理解」「書いてみよう」というような構成になっている。

このような内容・構成は国語教育の歴史の中で定着しているものであるので、日本語の読み書き教育においては正統的なアプローチであると言えるだろう。しかし、それが外国人学習者にとって一番よいフォーマットであるかどうかは今まで問われていなかったのではないだろうか。

3.3. 本学での問題・課題

本学のような留学プログラムの場合、学習者のバックグラウンドは様々で、日本に来るまでに使っていた教科書も様々である。ある基準を設けてプレースメントを行った場合でも、同じレベルに入った学習者の既習漢字や既習表現、既習単語には相当のばらつきが見られる。このようなばらつきに個別対応するようなコースを提供することは、今までのアプローチでは考えられておらず、既習の漢字や表現、単語など、ほぼ同じとしてコース内容を提供してきている。スタートラインを揃えるためには、学期の始めに下のレベルまでの既習漢字のリストを配り自習を促しているが、充分とは言えないのが実状であろう。

読み書きコースでの漢字学習を考えた場合、レベル毎の新出漢字や、その数を検討する必要があるが、対象となる学習者の既習漢字のばらつきが大きいと、新出漢字設定の意義が薄くなってしまう。また、既習漢字のばらつきに対応するためには、違うレベルにおいて新出漢字をある程度重複させることが重要になってくるが、これを計画的にデザインするのは難しい問題である。本学の場合は RWJ1 から 7 までの 7 レベルに分かれているが、漢字知識ゼロから日本語能力検定試験 1 級レベルの漢字数 2,000 余りのレベル毎の配分を考えると、重複を有効に入れるのは数的にはかなり厳しいことになる。

4. 読み書きの目標設定

4.1. 学習者のニーズ分析（アンケート調査結果）

ニーズ分析という言葉は日本語教育において広く出回っているが、実際に学習者のニーズ分析を具体的にやってコースを組み立てている、コース内容を調整しているというケースは少ないのではないだろうか。大学の日本語プログラムでは、「大学生に相応しい日本語能力」「先々の大学院進学の可能性にも対応できるだけの日本語能力」というようなニーズを想定し、基本的には教科書の内容に沿って教えるというのが一般的だろう。読み書きに特化したニーズ分析は更に少ないと思われる。

本稿の執筆にあたり、学習者の日本語での読み書き行動の現状についてのアンケートを実施した。稿末にアンケート内容を添付するが、実際のアンケートはインターネット上で行った。対象者は2010年秋学期の留学生全423名、アンケート実施期間は1週間、回答は強制ではなく任意である。実際の回答人数は81名で、回答率は19%と低かった。読み書き教育に対して新しいアプローチが必要であるかどうか検討するためには、適切な内容と量のアンケートを行う必要があるので、本稿のアンケートは第1次調査相当のものであると考えた方がよい。

以下、アンケート結果の抜粋を簡単な表にしていく。まとめ方としては、本学の読み書きレベル1、2、3に属する回答者を「初級」、レベル4、5の回答者と「中級」、レベル6、7の回答者を「上級」としてグルーピングした。全回答者の内訳は、初級が53名（全初級273名）、中級19名（全中級100名）、上級9名（全上級19名）となっている。アンケート実施方法にもよると思われるが、回答率を見ただけでも、初級と中級は約19%、上級は約47%と、レベルによって読み書きについての興味の度合いの違いが伺える。以下の表での%表示は、回答者内での割合で、未回答者がいる項目もあるので、合計で100%にならない場合もある。回答数が少なく、回答率も低いので統計的な意義を考えるのは難しいが、目を引く数字にはシェードをかけた。

1. 日本語の辞書を持っているか。最もよく使うタイプの辞書は。

	辞書なし	本タイプ辞書	電子辞書	パソコン上辞書
初級	22.6% (12名)	22.6% (12名)	32.0% (17名)	17.0% (9名)
中級	5.3% (1名)	10.5% (2名)	36.8% (7名)	42.1% (8名)
上級	0% (0名)	0% (0名)	55.6% (5名)	44.4% (4名)

この数字から、初級では辞書を全く使わない学習者も20%以上いるが、中級・上級ではほとんどの学習者が辞書を持っていることが分かる。また、中級・上級では本タイ

プの辞書をメインに使っている学習者は少なく、ほとんどの学習者は電子辞書やパソコン上の辞書を利用していることが分かる。

2. 教科書以外で、日本語の文書を週にどのくらいの時間読むか。

	読まない	30分以下	1時間以下	1~2時間	2時間以上
初級	9.4% (5名)	35.8% (19名)	24.5% (13名)	22.6% (12名)	0% (0名)
中級	0% (0名)	21.1% (4名)	31.6% (6名)	21.1% (4名)	26.3% (5名)
上級	0% (0名)	22.2% (2名)	11.1% (1名)	11.1% (1名)	55.6% (5名)

ある程度予想できることであるが、初級では日本語の授業以外で日本語を読む時間数は少ない方に偏っていることが分かる。また、中級ではバラツキが大きいが、これは日本語の読み書きに対する意識の違いも反映していると考えられる。上級はアンケート回答者の絶対数が少ないのであるが、2時間以上の学習者が50%以上となっている。

3. 教科書以外でどのような日本語の文書を読むか。3位までの人数。

(選択肢はアンケート提示順に「漫画」「雑誌」「新聞」「ネットサイト」「eメール」「その他」)

	友達からのeメール	インターネットサイト	漫画
初級	1位(52.8%: 28人) 2位(15.1%: 8人) 3位(5.7%: 3人)	1位(9.4%: 5人) 2位(20.8%: 11人) 3位(11.3%: 6人)	1位(22.6%: 12人) 2位(18.9%: 10人) 3位(11.3%: 6人)
中級	1位(68.4%: 13人) 2位(5.3%: 1人) 3位(10.5%: 2人)	1位(10.5%: 2人) 2位(47.4%: 9人) 3位(10.5%: 2人)	1位(5.3%: 1人) 2位(21.1%: 4人) 3位(21.1%: 4人)
上級	1位(22.2%: 2人) 2位(33.3%: 3人) 3位(44.4%: 4人)	1位(55.6%: 5人) 2位(22.2%: 2人) 3位(22.2%: 2人)	1位(11.1%: 1人) 2位(0%: 0人) 3位(11.1%: 1人)

上の表を、1位3点、2位2点、3位1点で点数化し、総合順位を求めると以下の表のようになる。

3.' 教科書以外でよく読む日本語の文書の順位。

	1位	2位	3位
初級	友達からのeメール	漫画	インターネットサイト
中級	友達からのeメール	インターネットサイト	漫画
上級	インターネットサイト	友だちからのeメール	雑誌

このデータから分かることは、まず、学習者は読み書きの教科書で扱っているような文章（物語／小説の抜粋、新聞記事、旅行記、日記、手紙、感想文、など）を実生活では全くと言っていいほど読んでいないということである。実生活で読んでいないから学習対象にしなくてよいということにはならないが、少なくとも読み書きの授業で扱っているような読み物が、学習者の実生活に直接的メリットを提供するものにはなっていないとは言えるだろう。

また、初級・中級では友達からのeメールやインターネットサイトが上位に入っているが、このデータを基に、実生活で既に親しんでいるからこれらを学習対象から外してもよいとはならないであろう。初級・中級の学習者の語彙力、漢字や表現の知識からすると、日本人からのeメールやインターネットサイトの理解度もそれほど高いとは考えにくく、学習項目にするメリットは大きいのではないだろうか。

上級ではeメールを押さえてインターネットサイトが1位になっており、また、初級・中級には見られなかった雑誌が3位に入っている。このデータからも上級レベルになると日本語で情報を得るといふ実践面が大きくなっていることが伺える。

アンケート前は、読み物に関しては漫画が上位にくるのではないかと予想していたのであるが、初級、中級、上級と日本語学習歴が長くなるにつれて漫画の順位は下がっており、上級では漫画よりも雑誌の方が上位にくる結果となっている。アンケート被験者の人数的な条件から、この結果をどれほど一般化して解釈してよいのかという問題はあがるが、教える側の先入観で題材を選ぶのは危ういとは言えるだろう。漫画好きの学習者は印象に残りやすいのであるが、好き嫌いがかなりはっきり分かれる題材だと考えられる。

このアンケート結果をある程度汎用性のあるコースデザインに生かすためには、1つ気をつけなくてはならないことがある。この表で「友達からのeメール」が1位になっているのは、日本に留学している学習者を対象としたアンケートだからである可能性が高い。アメリカなど、海外で日本語を学習している場合は、日本人の同世代の友達の数はかなり限られていることが考えられるので、日本人の友達からのeメールも少ないであろう。

次に、日本語を「書く」アクティビティについてのアンケート結果を検証していく。次ページ以降、表4、4'、5はパソコンや携帯電話での日本語タイピングの使用時間数について、表6と7は日本語の手書きについてである。

4. 日本語の授業以外で、週にパソコン／携帯で日本語をタイプする時間数。

	使わない	30分以下	1時間以下	1～2時間	2時間以上
初級	3.8% (2名)	32.1% (17名)	34.0% (18名)	17.0% (9名)	13.2% (7名)
中級	0% (0名)	21.1% (4名)	26.3% (5名)	26.3% (5名)	26.3% (5名)
上級	0% (0名)	11.1% (1名)	22.2% (2名)	11.1% (1名)	55.6% (5名)

全体的な傾向は、表2の日本語を「読む」方のデータと同じで、初級では日本語タイプの時間数も少ない方に偏っており、中級ではバラツキが大きい。上級では週に2時間以上が50%を超えている。

5. パソコン／携帯で日本語を打つ目的は？ 3位までの人数。

(選択肢はアンケート提示順に「ネット検索キーワード」「自分のブログ」「BBS/MIXI/Twitter/Youtube など」「eメール」「その他」)

	eメール	ネット検索キーワード	BBS/MIXI/Twitter/Youtube
初級	1位(%: 30人) 2位(%: 10人) 3位(%: 3人)	1位(%: 18人) 2位(%: 14人) 3位(%: 10人)	1位(%: 0人) 2位(%: 9人) 3位(%: 7人)
中級	1位(%: 15人) 2位(%: 3人) 3位(%: 0人)	1位(%: 4人) 2位(%: 9人) 3位(%: 3人)	1位(%: 0人) 2位(%: 6人) 3位(%: 6人)
上級	1位(%: 7人) 2位(%: 1人) 3位(%: 1人)	1位(%: 1人) 2位(%: 7人) 3位(%: 1人)	1位(%: 1人) 2位(%: 1人) 3位(%: 4人)

上の表を、1位3点、2位2点、3位1点で点数化し、総合順位を求めると以下の表のようになる。

5.' パソコンや携帯で日本語をタイプする種類の順位。

	1位	2位	3位
初級	友達へのeメール	ネット検索キーワード	BBS/MIXI/Twitter/Youtube
中級	友達へのeメール	ネット検索キーワード	BBS/MIXI/Twitter/Youtube
上級	友達へのeメール	ネット検索キーワード	BBS/MIXI/Twitter/Youtube

一目瞭然であるが、初級・中級・上級の全ての学習者の日本語タイピングの利用目的は同じ傾向を示している。上の表3' で見た「読みもの」の時と同様であるが、このデータを基に、実生活で既に親しんでいるからこれらを練習対象から外してもよいとはならないであろう。学習者と日本語でeメールのやりとりをした経験がある方であ

ればすぐ分かることであるが、中級レベルぐらいまでの学習者は漢字誤変換も多く、文法の間違ひも多い（これは従来の授業での手書き文章で見られることと同様である）。文章を自然に、正確にという点は従来の手書き練習でカバーしている内容と同じであるが、漢字変換も含め、日本語タイピングを練習項目にするメリットは大きいと考えられる。

6. 日本語の授業以外で、日本語を週にどのくらいの時間「手書き」するか。

	書かない	30分以下	1時間以下	1～2時間	2時間以上
初級	26.4% (14名)	35.8% (19名)	20.8% (11名)	5.7% (3名)	11.3% (6名)
中級	26.3% (5名)	15.8% (3名)	21.1% (4名)	26.3% (5名)	10.5% (2名)
上級	11.1% (1名)	22.2% (2名)	11.1% (1名)	22.2% (2名)	33.3% (3名)

このデータを見ると、かなりのパーセンテージの学習者が日本語の手書きを実生活でも利用しているように見えるが、これはアンケートの選択肢に「Note taking for class」を含めたからである。本学の留学生別科に来ている留学生は日本人学部生と同様の授業は履修しないので、「Note taking for class」とは日本語の授業でのことになる。（一般学部への留学生も5名いるが、本アンケートの回答者には入っていない。）手書きの内容について、下の表に示す。

7. どのような文書を「手書き」するか。

（選択肢はアンケート提示順に「日記」「Note taking for class」「Memo taking (e.g., station names, restaurant names, etc.)」「その他」)

	Note taking	Memo taking	日記
初級	1位(%: 22人)	1位(%: 14人)	1位(%: 1人)
	2位(%: 11人)	2位(%: 14人)	2位(%: 0人)
	3位(%: 0人)	3位(%: 3人)	3位(%: 2人)
中級	1位(%: 6人)	1位(%: 5人)	1位(%: 1人)
	2位(%: 4人)	2位(%: 3人)	2位(%: 0人)
	3位(%: 0人)	3位(%: 2人)	3位(%: 0人)
上級	1位(%: 4人)	1位(%: 3人)	1位(%: 1人)
	2位(%: 4人)	2位(%: 2人)	2位(%: 0人)
	3位(%: 0人)	3位(%: 1人)	3位(%: 1人)

このデータであるが、日本語の授業以外での実践的利用目的ということで「授業でのnote taking」をデータから外してみると、実生活での手書き文書はレストラン名や駅名などの簡単なメモ書きがほとんどになる。「その他」として、「漢字の練習のため」、

「友達と日本語を練習する時に」、「手紙」などが見うけられるが、それぞれ1名から2名程度である。日本語で日記を書いている学習者も数名見られるが、特に初級・中級では日本語の練習目的だと推測できる。

日本語の学習レベルが上がるにつれて、学習のための手書き能力の重要性も上がってくるのは間違いない。しかし、その場合も、直接必要となるのは、授業における **note taking** 能力や、調べ物をする時の **memo taking** 能力である。現代においては、ある程度まとまった文章は私達日本人でもワープロを利用するのが普通であり、外国人学習者にとっても、日本語の散文やレポートを手書きで書く必要性はほとんどないと言ってもよいだろう。考えられるのは、日本語の授業での **writing** のテストと日本語能力検定試験ぐらいではないだろうか。中級後期ぐらいから日本語能力検定試験を受けようとする学生が散見されるようになるが、テスト対策は1つのニーズとして、対象学生の人数も合わせて考慮すればよいのではないだろうか。

8. 日本語の読み書きに求めるもの。

(選択肢はアンケート提示順に「eメール読み書き」「インターネット利用」「翻訳者になる」「日本語専攻での大学院進学」「新聞雑誌を読む」「漫画を読む」「その他」)

	email 読み書き	Internet 利用	新聞雑誌	翻訳者になる	大学院進学
初級	1位(%:17人) 2位(%:11人) 3位(%:3人)	1位(%:7人) 2位(%:9人) 3位(%:13人)	1位(%:9人) 2位(%:12人) 3位(%:9人)	1位(%:7人) 2位(%:5人) 3位(%:4人)	1位(%:5人) 2位(%:3人) 3位(%:1人)
中級	1位(%:4人) 2位(%:5人) 3位(%:5人)	1位(%:4人) 2位(%:6人) 3位(%:3人)	1位(%:3人) 2位(%:4人) 3位(%:3人)	1位(%:5人) 2位(%:0人) 3位(%:4人)	1位(%:2人) 2位(%:2人) 3位(%:1人)
上級	1位(%:1人) 2位(%:0人) 3位(%:1人)	1位(%:1人) 2位(%:3人) 3位(%:4人)	1位(%:3人) 2位(%:3人) 3位(%:0人)	1位(%:3人) 2位(%:1人) 3位(%:2人)	1位(%:1人) 2位(%:0人) 3位(%:1人)

上の表を、1位3点、2位2点、3位1点で点数化し、総合順位を求めると以下の表のようになる。

8'. 日本語の読み書きに求めるもの。総合順位。

	1位	2位	3位	4位	5位
初級	email 読み書き	新聞雑誌	Internet 利用	翻訳者になる	大学院進学
中級	email 読み書き/Internet 利用 (1位2位同スコア)		新聞雑誌	翻訳者になる	大学院進学
上級	新聞雑誌	Internet 利用/翻訳者になる (2位3位同スコア)		email 読み書き/大学院進学 (4位5位同スコア)	

アンケートの項目 8 の設問がニーズ分析に相当する部分であるが、初級・中級では eメールの読み書きが第 1 位になっているのに対し、上級では 4 位 5 位同スコアの下位にきている。このことから、初級・中級では eメール読み書き練習のメリットは大きく、上級では既に習得したスキルとして練習のメリットは小さいと考えられる。また、インターネット利用や新聞・雑誌も全レベルで上位に入っており、これらの媒体から情報を得るといったニーズが高いことが分かる。

「翻訳者になる」は、筆者の経験からそういう学習者も少なからずいるだろうという予想で選択肢に入れたが、初級・中級では 4 位、上級では 2 位 3 位同スコアで 2 位に入った。上級 1 位の「新聞雑誌」とのポイントの差は 2 点で、上級では「新聞雑誌」「ネット利用」「翻訳者」はほぼ同程度のニーズだと言える。

ここで「翻訳者になる」というニーズについて少し掘り下げて考えてみると、ビジネスとして成立する翻訳の一番多いケースは、外国語から母語への翻訳である。つまり、日本語学習者にとっては、日本語を読み、それを自分の母語に翻訳するというパターンである。現在の日本語の授業で行っている読み書きは、日本語で書くというアクティビティがほとんどであり、母語に翻訳する練習は稀である。プロの翻訳家になるためにはそのためのスクールに通うぐらいのトレーニングも必要だろう。しかし、将来につながる可能性のあるものとして、中級・上級のコースでは翻訳の練習もあってもいいのではないだろうか。

上に示したようなアンケートデータは、調査対象者が海外の学習者か日本在住の留学生か、年齢層は、どの国か、などによっても結果がかなり変わってくると予想される。しかし、本稿のデータも 1 つのデータであることには間違いない。ここで示したような学習者の実生活での読み書き行動とニーズに対して、現在の読み書きの授業内容はどの程度リンクしているであろうか。「(大学院進学も視野に入れ)日本語学習を継続・向上するため」に日本語の読み書きを学習するというのは、1 つの大きな動機付けとなる。しかし、この場合は日本語学習という世界で全てが閉じてしまっている。日本語の会話力についてと同様、読み書きについても実社会でのメリットも考える必要があるのではないだろうか。

4.2. 目標設定

これまでの読み書き教育での目標設定は、「漢字〇〇字を覚える」「簡単な手紙が書けるようになる」「簡単な旅行記のような文章が読めるようになる」というような

ものであるが、このような目標設定は教科書の内容を言い換えたただけとも言える。つまり、教育内容が先にあって、それを目標として要約しているのである。しかし、本来あるべき方法論としては、目標を先に設定し、それに対して教育内容を考えるという手順になる。本稿では、前セクションでのアンケート結果とこれまでの読み書き教育の問題点・課題を踏まえて、読み書き教育の目標を検討するところからコースデザインをスタートする。

大きな目標設定としては、学習者の読み書きにおける自習能力育成に重点を置きたいのであるが、ある程度の基礎／土台がないと自習能力は議論できない。これは私達の英語学習経験を考えてみても自明のことである。コンピューター、インターネット、辞書などのツールがどんなに整っていたとしても、基礎が充分でない中学一年生レベルの英語学習者に **authentic** な英語の新聞や雑誌などの原文を自習で読ませるのは無理が大きすぎる。同様に、日本語学習者にとっても、ある程度以上の漢字の知識、単語の知識、文法・構文の知識がないと、自習の成果を期待することはできない。

「ある程度以上の基礎」とは漠然とした条件であるが、学習者を「初級」「中級」「上級」という 3 つのステージに分けると、「初級」での目標は自習能力育成に向けての土台作り、「中級」での目標は自習能力開発・育成とすることができるのではないだろうか。そして「上級」は「中級」の延長として、扱える表現と漢字数の増加に伴い、読み書きの質と量（効率）を上げていくことになる。上級の最終ステージでは、自習能力はほぼ充分なはずであるので、小説や新聞、学術誌の論文など、**authentic** なものを読み、それらについて **discussion** を行い、また自分で様々なタイプの日本語の文章を書いていくなど、従来の上級での内容に戻ることになるであろう。

自習能力開発の土台作りということで考えてみると、初級の一番最初のステージの教育内容はこれまでの読み書き教育とそれほど変わったものにはならない。ひらがな・カタカナ、そして漢字の概念、基本的な漢字を学習し、少しずつ読み書きの能力をつけていくことになる。まずは日本語の教科書の日本語の文を読むことに慣れ、日本語の授業での課題などをできるだけ日本語の読み書きでこなせるようにすることが必要である。それと並行する形で、読み書き能力の実用性を考えたアクティビティを入れていかななくてはならないが、それも従来の初級の読み書き教育で実践していることである。2 学期目（50 時間ほどの正規の授業を受けた後）ぐらいからは、更に実用性を考えたアクティビティを増やしていくのが理想的であるが、セクション 4.1. であげたような学習者の実社会での読み書き行動、例えば日本人の友だちとの e メール

のやりとりやインターネットの日本語ホームページへのアクセスなどを反映・促進する形にしていくことを一つの方針とすることができるだろう。本稿では初級についての議論はここまでとし、以下、中級での読み書きコースのデザインを具体的に考えていくことにする。

中級での読み書き教育の目標を「自習能力開発・育成」としたが、それにニーズ分析による実用的メリットを加えて、もう少し具体化したものを以下に挙げる。

「読む」能力においては、

1. 学習者が未習の漢字を自分で調べて、単語を理解できるようになる。
2. 学習者が未習の表現を自分で調べて、文を理解できるようになる。
3. 学習者が自分で読みたいものを選んで、内容を理解できるようになる。
4. インターネットでの検索、情報収集に慣れる。
5. 学習者が日本語を自分の母語に翻訳できるようになる。

「書く」能力においては、

1. パソコンの日本語ワープロを使えるようになる。
2. 携帯電話で日本語のメールが打てるようになる。
3. お礼の手紙、各種応募書類など、必要な文書を日本語で書けるようになる。

以上のような設定目標を踏まえ、次のセクションにおいてコース内容について具体的に検討していく。本稿での検討項目は、「成績」、「コースの継続性」、「読み物」、「漢字・単語・表現」、「課題、テスト」についてである。

5. コースデザイン、試案

5.1. 成績の取り扱い、コースの継続性

大学のコースということで考えた場合、成績をどのようにつけるかということがひとつの大きな考慮点となる。成績のつけ方／評価の仕方の大きな方針としては、コース内容をどれだけ習得したかという **Achievement** 評価と、どれだけの実力に達したかという **Proficiency** 評価という2つの視点がある。

出席点、宿題、授業内容を反映したテストの点数などは **achievement** の範疇に入る代表的なものであり、点数化は難しいが努力点のようなものも **achievement** に入る。

一方、Proficiency 評価は努力の程度や学習のプロセスなどに関わらず、どれだけ会話力・読み書き能力がついているかという proficiency (実力) を評価するものである。英語で言えば TOEFL や TOEIC が代表的なもので、日本語では日本語能力検定試験が代表的なものである。Proficiency 評価では最終的な実力が全てであるので、授業の出席や宿題などは評価対象にはならない。

Achievement 評価と Proficiency 評価の実際の運用方法としては、点数による多段階評価、Letter Grade による任意段階評価 (優良可不可、ABCDF など)、そして、Pass/Non-Pass の 2 段階評価がある。これら実際の運用方法は、日本、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパなどの大学で様々であるが、筆者の知る限り、大学での日本語の成績のつけ方は、授業内容をどれだけ忠実に習得したかを評価する方法が一般的、つまり Achievement 評価の要素の方が強いようである。

本稿の中級読み書きコースデザインでは、大きな設定目標を「自習能力の開発・育成」とした訳であるが、自習能力を測ることは proficiency を測ること以上に難しいというのは想像に難くない。同様に、コース開始時からコース終了時までの自習能力の伸びを測ることも難しい。以下のセクションで詳しく議論していくが、本稿のコースデザインでは、コース開始時とコース終了時での習得表現、習得単語、習得漢字などは学習者 1 人 1 人で違うことを前提にするので、成績評価においても同じ基準を全員に当てはめることはできないことになる。このようなコースデザインで使える評価方法は、点数や Letter Grade での評価ではなく、自習能力開発・育成のために設定した課題をこなしたかどうかという achievement の Pass/Non-Pass の識別しかなさそうである。

ここで問題となるのはコースの継続性である。1 つの独立したコースとしては Pass/Non-Pass でも成立するのであるが、多くの場合、日本語のコースは、レベル 1、2、3、4、、、というように、上のコースへのつながりを考えなくてはならない。本稿で対象としている「中級」は、関西外国語大学でのレベル 4 と 5、または 4、5、6 程度と考えているが、まず、本稿の中級読み書きコースデザインでは、従来の 4/5、または 4/5/6 を区別せず、その範囲の学習者は全て同じコースに入れることになる。そして、学習者がそのコースを Pass した場合、「自習能力開発・育成」のメリットがなくなるまで、すなわち「上級最終ステージ程度」に達するまでは同じデザインのコースで「自習能力開発・育成」を継続するのである。

このようなプログラムデザインの場合は、コース名も従来のようなものではなく、

Intermediate Practical Reading and Writing 1（以下、IPRW1）、IPRW2、IPRW3 というようなものが適当だろう。従来のレベル 4/5/(6)の学習者は全て IPRW1 に入り、Pass すれば IPRW2 へ、その後 3、、と進むのである。IPRW1 で Non-Pass の学習者は IPRW1 をリピートすることになる。これらは単に大学の単位システムを考慮したものであって、実際には Pass しても Non-Pass であっても、IPRW1/2/3...のコースデザインは同じである。

上に述べたように、このような中級段階（IPRW1/2/3...）の次のステップとしては、従来の上級最終ステージに戻ることになる。このステップアップの可否の判断は、IPRW 内での Pass/Non-Pass とは違い、その時点での読み書きの proficiency テストということになる。IPRW1/2/3 のどの段階からでも構わないのであるが、「自習能力開発・育成」のプログラムをこなす中で相応の実力をつけたと自分で思う学習者は、上級最終ステージに進むための proficiency テストを受けるというシステムにするのである。ステップアップ可否の簡単な目安としては、日本語能力検定試験 1 級の漢字・単語リストが使えるであろう。

5.1. 読み物の取り扱い

読み書きの教材を考える場合、読み物がその中心となる訳であるが、適切な読み物を選ぶ、または、適切な読み物を作るという作業は大変難しいものである。教材作成経験がある読者の方には謂わずもがなであるが、まず、学習者にまんべんなく面白い読み物にするのは難しい。また、面白い題材があっても、既習の表現・単語・漢字などの問題で、使える形にするのが難しい。更に、複数のレッスン、複数のレベルにまたがって既習の表現・単語・漢字を考えなくてはならない。内容的にも学習者にとって面白く、かつ、複数レッスン／複数レベル全体として整合性のあるデザインにするのは困難を極めると言ってよいだろう。

本稿のコースデザインでは、上述のようなことが全く問題にならないというのが 1 つの大きなメリットだろう。学習者に自分で読みたい読み物を選ばせるのである。漫画、小説、雑誌の記事、インターネットホームページなど、何でもよい。自分が読みたいものを読ませる。従来の読み書きコースでは、辞書やワープロを使わないことを大前提としていたので、既習の表現・単語・漢字全てが問題になっていたが、本稿のデザインでは、辞書、翻訳ツール、ワープロなど、利用できるものは全て使うことを前提とする。セクション 4.1.のアンケート調査結果で示した実社会での読み書きの使

用状況を考えると、全て学習者の頭と手だけでという前提自体が不自然であり、読み書き能力を育てる機会を大きく狭めているのではないだろうか。

学習者は自分が選んだ読み物を使って自習能力の開発・育成に取り組むのであるが、1つのコースで1つの長い読み物という形式になると、一学期間でのメリハリがなくなってしまう、コース内での進捗管理なども難しくなってしまう。そこで、レッスンという区切りは残し、レッスン毎の読み物のボリュームは大体のところでコントロールする。1レッスンで扱う読み物の分量はA4サイズにプリントして2ページ前後が適当であろうか。

学習に対して受身の学習者は必ずいるので、自分で読み物を選ぶことができない学習者も考えられる。そういうケースに対応できるように、いくつか読み物の候補をインストラクター側で揃えておくことは必要になるだろう。インターネット上のホームページで言えば、大学案内、JETプログラムの応募要項、芸能人のオフィシャルホームページ／ブログ、電子新聞（経済、政治、スポーツなど）、企業案内、ビデオゲーム情報、スポーツチームのホームページなど、何でもよい。

例えば1学期を8レッスンで構成するとして、2レッスンぐらいは全員が共通の読み物を課題とするのもよいであろう。その場合は汎用性／一般性が高い読み物でなくてはならないが、1つはコース全体の導入も兼ねて天気予報のホームページであるとか、yahooの見出しページ、レストラン情報（メニューも含む）、新幹線のサイバーステーション、JRのホームページ（「おでかけネット」など）、旅行情報のホームページなどでもよいだろう。もう1つは、コースの中盤以降に、電子辞書や翻訳ツールなどの使用に慣れたかどうかを見るために少し難しめの読み物、例えば大学院案内や電子新聞の論説文などを課題とするのもよいかもしれない。

学習者には自分が読みたい読み物を課題として選ばせるのであるが、パソコンの利用に頼る部分が大きくなるので、コース前半、また、読み書きの proficiency が低い場合は、印刷物ではなくインターネット上で扱える読み物の方がよいと一応はガイドした方がよいだろう。また、翻訳の練習をする際には、英語と日本語の両方がサポートしてあって、切り替え可能なホームページなどが有効利用できるであろう。

5.2. 表現・単語・漢字の取り扱い（漢字・単語クイズ）

本稿のコースデザインでは（電子）辞書、翻訳ツール、ワープロなどの使用を前提とするので、表現／単語／漢字については既習・未習に関係なく読み物を選ぶことに

なる。では、ツール任せにしておいて、表現／単語／漢字を全く学習しないでよいか
という、そういうことにはならない。上述のようなツールを使う場合も、習得して
いる表現／単語／漢字が多ければ多いほど読み書きの作業の効率はよくなる。また、
読む方ではなく書く方では、未習のものを積極的に使うとエラーが多くなる原因にも
なる。これらの理由から、未習の表現／単語／漢字の学習は、読み書きをツールに大
きく頼る場合でも必要となってくるものである。また、「自習能力の開発・育成」を
目標として設定しているが、その成果が未習の表現／単語／漢字の自習ということに
なる。この部分は学習者にきちんと説明する必要があるであろう。

本稿のコースデザインでは、学習者の既習の表現／単語／漢字の個人差をそのまま
受け入れ、学習者本人がレッスン毎の **target** の表現／単語／漢字を設定する。基本的
には、表現／文法は会話の方のクラスでカバーするものであるなので、読み書きの方
では **comprehension** ができればよいものとし、**target** の数は少なめに設定する。また、漢
字学習は覚えたい単語の表記方法という考えで、単語優先で **target** を選択するよう
に学習者に指導する。単語優先ではあるが、数のコントロールは漢字数で見た方がやり
やすいので、1 レッスン当たりの **target** 漢字数を 40 字程度にすると、1 コース 8 レッ
スンで漢字 320 字増ということになる。

数のコントロールについてであるが、日本語能力検定試験のレベル分けを大雑把に
「初級」「中級」「上級」という区分にしてみると、初級修了時は単語約 1,500 語、漢
字約 300 字、上級スタート時が単語約 6,000 語、漢字約 1,000 字程度になり、中級に
相当する段階で単語数で 4,500 語程度、漢字数で 1200 字程度増やさなくてはならない
ことになる。これを 2 学期や 3 学期で達成しようというのはかなり厳しい。特に、単
語の方であるが、4,500 語規模の単語数を日本語のコースで体系的に増やすというコ
ースデザインは非現実的であり、学習者の自習に頼らざるをえない部分になってくる。
その一方、漢字数の方は 700 字、1,000 字程度を数コースでカバーすると考えると幾
分コントロールはしやすくなる。

単語と漢字の数の設定は無理がないようにしなくてはならないが、1 コースで増や
す漢字数の目安を 300 ぐらいと考えると、1 レッスン当たり漢字 40 個弱となり、かな
りの数になってしまうが、中級で増やすべき単語の数と漢字の数を考えると仕方のな
いところだろう。

5.3. ツールの利用、コンピューターの利用

セクション 4.1.で見たように、電子辞書またはパソコン上の辞書を使っている中級レベルの学習者は約 79%であり、このようなツールの利用を前提としたコースを組み立てることは非現実的ではない。また、以後の学習のためにも良い辞書を持っておくメリットは大きいので、辞書をまだ持っていない学習者には電子辞書の購入を促してもよいだろう。本稿のコースデザインでは市販の教科書は使わないので、その分の費用を辞書の購入に当てることができる。但し、よい電子辞書となると値段が数万のレベルになってしまうので、購入を義務化する訳にはいかない。コースデザインとしては、従来の本タイプの辞書とインターネット上のフリーの簡易辞書を併用するように考え、電子辞書は optional とする。

辞書の利用とともに、ワープロやインターネットも積極的に利用するので、授業を行う教室は学習者全員にパソコンが提供されているパソコン教室のようなところが望ましい。本学の日本語プログラムの場合はこのような設備に恵まれているが、設備上の制約条件になることは間違いない。授業において教員しかパソコンを使えない場合、また、パソコンを使えてもインターネットにアクセスできない場合など、様々な条件が考えられるが、以下のセクションで提案する授業内容も、条件に応じて調整が必要になる。教室外で学習者がパソコンにアクセスできないケースはほとんどないであろうから、パソコンを使った作業を教室外で行うように考える。

アンケート結果からも、中級の学習者でも日本語ワープロの利用にはそれ程慣れていないことが伺えるので、ワープロの練習を学習者全員に共通の課題としてコースの始めの方のレッスンに入れるとよいだろう。練習方法としては、2 つ考えられる。1 つは、ワープロタイピングのみを目的として、学習者がインターネットや雑誌などから抜き出したものを完全に同じようにタイプする練習、もう 1 つは、もっとアクティビティの動機付けを上げて、学習者自身が手書きしたものをワープロ文書に直すという練習が考えられる。

読解においては未習の単語を自分で調べなくてはならないが、インターネット上の文書など、すでにパソコンで扱える形になっているものは、その漢字表記の単語をコピーペーストするだけでネット上の漢字辞書を使って、読みと意味が検索できる。漢字辞書としては以下のようなものがある。

<http://www.kanjiiten.net/>

<http://www.sanrui.co.jp/web/>

一方、雑誌上の漢字表記の単語などは、その読み方が分からなければ辞書を使うこ

とができない。私達日本人は漢字辞書の使い方のトレーニングを受けているので、画数引き、部首引き、音読み訓読みの引きなど、複数の方法で漢字単語を調べることができるが、このような日本人と同様の漢字辞書利用を外国人学習者に対して想定するのはかなり厳しい。しかし、この点でも現代はツールが発達し、パソコン上でもマウスを使って漢字の形をトレースし、漢字を絞り込んで見つけることができる。ポータブルの電子辞書でもこの機能をサポートしているものも珍しくない。ワープロのタイピングと同様、漢字単語検索の練習も学習者全員共通の課題としてコース当初に取り入れるとよいだろう。

Authentic なマテリアルを自習で扱う場合は、単語と漢字だけでなく、未習の表現が問題となる。今の時代ではインターネット上の翻訳ツールが発達しているので、表現の理解に関しては翻訳ツールを利用することにする。例えば、以下のようなものである。

<http://www.excite.co.jp/world/english/>

このような翻訳ツールは単語レベルだけでなく、フレーズレベルでも使えるので、表現の理解に利用することができる。但し、翻訳の正確性は入力するフレーズの長さやコンテキストによる部分も大きいので、その辺りの感覚を養うことも自習において重要なこととなる。単語やフレーズを調べ、文脈の中で意味の整合性がとれていない場合は、教員に確認するようにする。

以上のように、ワープロやインターネット上のツールに習熟することもコース全体の目標の1つとなるので、コース当初にまとめて練習を入れるとよいだろう。

5.4. レッスン構成、授業内容

本稿のコースデザインでは「自習能力の開発・育成」を目標とするので、授業内容は従来の読み書きの授業とはかなり異なったものとしなくてはならない。上のセクションで述べたように、ワープロやインターネット上のツールを使う練習は、学習者の共通課題としてクラスで行うメリットがある。それ以外は学習者が個人個人で読み物を選び、target の単語と漢字を設定するので、教員の対応も個別対応ということになる。

1つの方法としては、クラスの時間を学習者毎の consultation の時間として割り当てることが考えられる。筆者も未経験の授業形態なので判断が難しいが、1人当たり5分から10分ぐらいを想定すればよいのではないだろうか。1クラスの学生が20人ぐ

らの場合は、1回のクラスで全員の **consultation** を行うことはできないが、全て個別対応であるので、毎回全員をカバーする必要はないだろう。スケジュールとしては2回の授業でクラス全員をカバーするぐらいでよいのではないだろうか。

Consultation の内容であるが、教員として指導すべきものとしては、読み物の選択／分量に関するアドバイス、単語／漢字／表現選択に関するアドバイス、単語や表現の理解や漢字検索に関するアドバイス、ツールの利用方法に関するアドバイス、文書全体の理解に関するアドバイスなどが考えられる。

それぞれのレッスンで具体的に何を成果物とすべきか考えなくてはならないが、ツール利用方法練習のレッスンでは、課題として作成したツール利用練習問題をこなすことにすればよいであろう。また、読み物読解のレッスンでは本文の日本語での要約を課題とすると教員側もチェックしやすい。翻訳練習のレッスンでは、学習者の母語に翻訳したものが成果物となる。その内容をチェックするには相当の外国語能力が必要になってくるので、教員側の負担も大きくなる。それを避けるためには、多言語をサポートしているホームページなどの利用に頼る割合が大きくなるのではないだろうか。お礼の手紙や履歴書、汎用性の高い書き物を練習するレッスンでは、日本語で書いた文書が成果物となる。

このような成果物を想定した場合、コース履修者全員に共通の課題となるツール利用練習、書き物のレッスンでは、教員が成果物がある程度詳しく見て学習者に対してフィードバックすることも可能であろう。これは従来の読み書きコースと同様である。しかし、学習者に対する個別対応部分、つまり、読み物の読解と翻訳練習のレッスンでは成果物を詳しく見てフィードバックするだけの余裕はない可能性も高い。本コースデザインの設定目標である「自習能力開発・育成」のためには、成果物に達するまでのプロセスを如何にスムーズにできるかという点が1つの課題であるので、課題をこなすことに重点を置き、成果物の正確性についてはある程度自習の範囲内という見切りをつけなくてはならないことも考えられる。

実際のレッスン内容を、タイプ別にまとめてみると以下のようなになる。

I. ツール利用練習のレッスン

- ① 日本語ワープロタイピングの練習（作成した教材使用）
- ② ツールを利用した漢字検索の練習（作成した教材使用）
- ③ 翻訳ツールの利用練習（多言語対応 HP の利用）

II. 読解のレッスン／翻訳のレッスン

- ① 読み物／翻訳対象の選択（要 consultation）
- ② Target とする単語・漢字、表現の選択（リストの雛形を教員が準備）
（レッスン毎の単語表・漢字表・表現リストの作成）
- ③ 辞書利用、翻訳ツール利用での読解／翻訳（要 consultation, Q&A）
- ④ 要約文／翻訳文の作成（要約は教員がチェック、翻訳は既存のもので自習、または教員がチェック）

III. 書くためのレッスン（履歴書、お礼の手紙、応募書類、など）

- ① 教員が指定した履歴書、お礼の手紙、応募書類関係の HP から
Target とする単語・漢字、表現の選択
（レッスン毎の単語表・漢字表・表現リストの作成）
- ② 辞書利用、翻訳ツール利用での文書フォーマット理解、
手紙文読解／翻訳（要 consultation, Q&A）
- ③ 各種文書の作成（作成物は教員がチェック）

書くためのレッスンでは、文書のフォーマット理解や手紙文の読解などが学習者にとって共通課題となるので、その部分については従来のような授業形式をとってもよいと思われる。

1 つ考慮しなくてはならないのは、同じコース内容のリポートについてである。セクション 5.1. に書いたように、本稿のコースデザインでは上級レベルに達するまでは IPRW1/2/3... というようなコース名で基本的には同じ内容のコースをリポートすることになる。その場合、ツール利用練習や書くためのレッスンでは上述のように共通課題の部分が比較的多いので、継続履修の学習者にとって全く同じ課題のリポートにはならないように工夫する必要があるだろう。その部分だけはステップアップを考慮に入れた教材の開発が望ましい。

5.5. 課題、クイズ、テスト

本稿のコースデザインでは電子辞書や日本語ワープロ、インターネット上の辞書ツールなど、利用できるものを全て利用し、その上で読み書きにおける「自習能力の開

発・育成」を目標としている。このようなコースデザインにすると、いわゆる従来の宿題に相当するものは、授業中に行う学習行動と基本的には同じ内容となる。授業の場合は教員というリソースを自習のために使えるというだけである。

従来の漢字／単語クイズやレッスンテスト、中間／期末テストについては、単語／漢字／表現の学習に対する考え方自体が違ったものになっているので、今までと違ったアプローチが必要になってくる。従来のクイズやテストは、これらのアイテムの習得（暗記）を目標とした形態になっており、クイズやテストの際は自分の頭と手書きという手段しか使ってはいけないうことになっている。しかし、本稿のコースデザインにおいては、単語／漢字／表現の習得は、ツールを利用して読み書きをこなす上での効率アップのためという位置づけになる。基本的には、覚えていなくても辞書などを使って読み書きがこなせばよい。しかし、覚えている単語／漢字／表現が多いと読み書きの効率がよい。だから、覚えるための学習も行う、というロジックである。

また、もう1つ単語／漢字／表現習得を促す理由としては、最終的に上級にステップアップするためにはそれに相当するだけの単語／漢字／表現をマスターしておかなくてはならないということが挙げられる。本稿のコースデザインでは、この2点、つまり、ツールを利用した読み書きプロセスの効率化と、上級へのステップアップ準備ということを動機付けとし、各種クイズやテストを行う。

具体的には、学習 target となる単語／漢字／表現は学習者個人がレッスン毎に設定するので、共通のクイズ問題やテスト問題は使えないことになる。このような条件のもとに行える単語／漢字クイズの形式としては、1つのアイデアにすぎないが、例えば学習者がレッスン毎に target として設定する漢字が40個の場合、10個ずつ4回に分け、自分でその漢字を含む文を10個作って覚えることとする。そして、授業の漢字クイズは白紙のフォーマットとし、学習者が自分で覚えてきた10個の文を書くというものである。4回の授業で40個の漢字をカバーすることになる。

基本的には漢字を「覚える」ことがコースの目標ではないので、上記のような漢字クイズをどのように成績に反映するかは検討しなければならない。実際問題としては何かしらの incentive がないと何もしない学習者も多いので、上記のような漢字クイズを点数化し、学期末に総合的に Pass か Non-Pass かの判断をする際の1つの項目にするというやり方も考えられる。別の方法としては、成績には全く反映させず、学習者にとっての学習の機会にするだけというやり方も考えられる。この考え方の場合、漢字クイズ自体もなくしてしまっていて、自分で覚えるために練習したものを宿題として提

出させ、提出の事実のみを評価するというやり方も考えられる。自分で覚えるための練習とは、例えば、漢字単体や単語／熟語レベルで10回書いたものと文章に入れて5回書いたもの、などのように単純なものでよいだろう。単語レベルのものは学習者が自分で調べたものをモデルとすることができるが、文章を書かせる場合は、教員が事前にチェックした方がよい。

最後に、テストのフォーマットとしては **Take-home** とするのがよいのではないだろうか。本来、読み書きとは完全にプライベートなものであって、時間的制約やツールなどの制約もないものである。通常の読解の授業では学習者が自分で好きなものを読み物として選ぶのであるが、**Take-home exam** を行う場合は、教員が受講者全員に共通の読み物を指定し、その要約文を日本語で書かせる、英文で書かせる、などを課題とするという方法が考えられる。**Take-home exam** にすると、友達に手伝ってもらったり、ホストファミリーに手伝ってもらったりというようなケースも考えられるが、これも本来の読み書きでは許されるべきものである。友達やホストファミリーも、一時的なものかもしれないが、利用可能なリソースの1つである。このようなテスト形式であれば、通常のレッスンで想定している課題・成果物と同様となるので、テスト自体をなくしてもよいかもしれない。その代わりに、レッスン毎の成果物だけで評価するのである。

最終的な評価であるが、セクション 5.1. で述べたように **Pass/Non-Pass** だけの区別にする場合は、その基準を明確にしておかなくてはならない。シンプルなものにしようすると、課題を全部提出すれば **Pass** というようなものでもよいのではないだろうか。本稿のコースデザインでは、**Pass** であっても **Non-Pass** であっても、上級後期の基準をクリアするまでは同じシラバスのコースを取り続けることになる。学習者が自分で読み物を選ぶので、毎回違った題材を対象とすることになるが、上級後期の実力をつけるまで「自習能力を開発・育成」することを目標として読み書きの学習を続けるのである。

上級後期に入るレベルに達しているかどうかの判断であるが、この場合は何のツールにも頼らずに読み書きを行う能力が一定レベルに達しているかどうかを計らなければならないので、従来のプレースメントテストをそのまま使えばよい。本稿のデザインによる中級読み書きコースを何回履修した後でもよいのであるが、学習者がそれだけの実力をつけたと自己診断したらプレースメントテストを受けることにすればよいだろう。

6. おわりに

まだ十分な調査とは言えず、テスト調査レベルではあるが、本稿のアンケート調査によると、学習者の実生活での読み書き行動は、従来の読み書きの授業で行っている内容とはかなり異なっていることが分かる。調査結果を踏まえ、本稿では、外国人の日本語学習者にとって、本当にメリットのある読み書きのスキルとは何か、それを養うための読み書きの授業はどうあるべきか、という視点で、中級レベルの新しい読み書きコースの提案を行った。

これまでのコースデザインとの違いを分かりやすく単純化して表現すると、従来の「単語・漢字・表現の習得（暗記）をベースとした読み書き能力育成」というデザインから、大きく発想の転換を行い、「ツールを利用した自習能力の開発・育成」を目標としたコースデザインを試みたことになる。紙面や時間的制約で、本稿では具体的な教案例や教材例、課題例などまでは準備することができなかった。また、新しいコースデザインは実際にやってみて分かることや調整が必要なことも多いのが常で、本稿の議論で充分だとは言いがたい。かなり大胆な提案であるので、実践が難しいところもあると考えられる。

そのまま実践に移すことは難しいかもしれないが、本稿の内容のうちの 1 つでも、学習者にとって実生活でメリットを感じられる読み書き教育について考える叩き台になれば幸いである。全面的な変更でなくとも、課題の 1 つを採用、また、レッスンの 1 つを採用、など、部分的な採用の可能性も含め、継続的な課題としてこれからも考えていきたい。

参考文献

- コーベニ澤子・ケネス G ポストン・高屋敷真人・中松知子（2006）『リビングジャパニーズ Book1』 くろしお出版
- 近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川智（2009）『上級へのとびら』 くろしお出版
- 財団法人海外技術者研修協会（2000）『新日本語の中級』 スリーエーネットワーク
- 筑波ランゲージグループ（1992）『Situational Functional Japanese 1, 2, 3』 凡人社
- 土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子（1995）『日本語中級 J301』 スリーエーネットワーク
- 富岡純子・島恭子（1991）『日本語中級読解入門』 アルク
- 坂野永里・大野裕・坂根庸子・品川恭子・渡嘉敷恭子（1999）『げんき I, II』 The Japan

Times.

平井悦子・三輪さち子 (2004) 『中級へ行こう』 スリーエーネットワーク

平井悦子・三輪さち子 (2007) 『中級を学ぼう 中級前期, 中級後期』 スリーエーネットワーク

Makino, S., Abe Hatasa, Y., and Hatasa, K. (1998) なかま, Houghton Mifflin Company.

Miura, A., and Hanaoka McGloin (1994) *An Integrated Approach to Intermediate Japanese*, The Japan Times.

Nagara, S., Nakanishi, Y., Iguchi, A., Chino, N., Shimomura, A., Yokobayashi, H., Yamaura, Y., Hayashi, S., Hayashi, N., and Saito, A. (1990) *Japanese For Everyone*, Gakken.

(hirata@kansai-gaidai.ac.jp)

参考資料：アンケート内容

5 minute Questionnaire about 日本語の読み書き

This questionnaire is to study how learners are actually using their reading/writing skills in Japanese in real life. I would like to use your feedback to consider if we need to make any changes to improve our reading/writing classes (e.g., making them more practical and useful in a concrete way). Your feedback is highly appreciated. Thank you very much in advance for your cooperation.

SPJ3A/B/C Yu HIRATA

1. Which RWJ class are you currently taking? Choose one from the pull-down menu.

- Not taking RWJ RWJ1 (5weeks) RWJ1 (full semester) RWJ2 RWJ3
RWJ4 RWJ5 RWJ6 RWJ7

2. Do you have a Japanese dictionary? If you have more than one type of dictionary, choose them all from most frequently used to less frequently used from the pull-down menu.

0. None

1. Most frequently used; 2. 2nd most freq.; 3. 3rd most freq.

Book dictionary Electronic dictionary on PC/MAC Portable electronic dictionary (including DS, PS3, etc.)

3. ABOUT READING: Other than for studying Japanese, how long PER WEEK do you spend for reading Japanese texts in real life? Check one box.

- None less than 30 minutes less than 1 hour 1~2 hours
More than 2 hours

4. ABOUT READING: What kind of Japanese texts do you usually read? If there is more than one type of reading material, choose them all from most frequently read to less frequently read from the pull-down menu. When you choose "other kinds of texts," please write what they are in the box below.

1. Most frequently read; 2. 2nd most freq.; 3. 3rd most freq.; 4. 4th most freq.; 5. 5th most freq.; 6. 6th most freq.

Manga Magazines Newspapers Internet sites
e-mail from Japanese friends Other kinds of texts (such as: _____)

5. ABOUT TYPING: Other than for studying Japanese, how long PER WEEK do you spend for typing Japanese texts in real life (using a computer, cell-phone, etc.)? Check one box.

- None less than 30 minutes less than 1 hour 1~2 hours
More than 2 hours

6. ABOUT TYPING: For what purpose do you type Japanese texts? If there is more than one purpose, choose them all from most frequent to less frequent from the pull-down menu. When you choose "other kinds of typing activities," please write what they are in the box below.

1. Most frequent; 2. 2nd most freq.; 3. 3rd most freq.; 4. 4th most freq.; 5. 5th most freq.

Keyword typing to use "SEARCH" on the Internet, libraries, etc.
Your own blog in Japanese BBS/ MIXI/ Twitter/ Youtube in Japanese
e-mail to Japanese friends Other kinds of typing activities (such as: _____)

7. ABOUT HAND-WRITING: Other than for studying Japanese, how long PER WEEK do you spend for hand-writing Japanese texts in real life? Check one box.

- None less than 30 minutes less than 1 hour 1~2 hours
More than 2 hours

8. ABOUT HAND-WRITING: For what purpose do you write Japanese texts by hand? If there is more than one item, choose them all from most frequent to less frequent from the pull-down menu. When you choose “other kinds of writing,” please write what they are in the box below.

1. Most frequent; 2. 2nd most freq.; 3. 3rd most freq.; 4. 4th most freq.

- Diary Note taking for class
Memo taking (e.g., station names, restaurant names, etc.)
Other kinds of writing (such as:)

9. What kind of benefits (actual uses in real life) do you want to obtain most from Japanese reading/writing? If there is more than one reason, choose them all from most desired to less desired from the pull-down menu.

1. Most desired; 2. 2nd most desired; 3. 3rd most desired; 4. 4th most desired;
5. 5th most desired; 6. 6th most desired

- e-mail reading/writing in Japanese Internet browsing Becoming a translator
Going to graduate school majoring in Japanese
Newspaper/Book/Magazine reading Manga reading
Other kinds of benefits (such as:)

Thank you very much for your cooperation. Yu HIRATA